

二〇一〇年度国文学会彙報

壬生博幸（立命館中学・高等学校教諭）

・講演

與謝野晶子の源氏物語礼賛歌の成立

伊井春樹（大阪大学名誉教授・国文学

研究資料館前館長・逸翁美術館館長）

二〇一〇年度国文学会活動状況

△新入生歓迎会▽ 学生会主催

二〇一〇年四月五日（月） 京田辺校地生協食堂

△国文学会研究会発表会▽

二〇一〇年二月三日（火） 寒梅館2F203号室

△国文学会総会・研究発表会・講演会▽

二〇一〇年六月二〇日（日） 寒梅館2F203号室

・研究発表

井伏鱒二「花の町」へと至る道

——日本語の南方進出と読者の欲望——

佐藤貴之（本学大学院博士課程前期課程）

・総会  
静的世界への試み——谷崎潤一郎『鶴唳』考——

三宅良昭（本学大学院博士課程前期課程）

小説テキストにおける受身表現の使用傾向

山本和恵（本学大学院博士課程前期課程）

村上春樹と地下鉄サリン事件

——『アンダーグラウンド』『約束された場所で』をめぐって——

和語名詞における音韻構造の史的変遷

入江さやか（本学文学部助教）

邢靈君（本学大学院博士課程後期課程）

「けり」の出現傾向と文章類型との関係について

——『宇治拾遺物語』の分析——

△講演会▽ 院生部会主催

二〇一〇年一〇月三〇日（土） 至誠館23

大畑陽子（本学大学院博士課程後期課程）

役割語とキャラクターをめぐって

国語教育実践報告「自己」との対話を図る文学教育のあり方を中心に」

金水敏（大阪大学文学研究科教授）

△文学散歩▽ 学生部会主催

・第一回 七月四日(日)

文学散歩『源氏物語』～宇治十帖の舞台をめぐる～

源氏物語ミュージアム 平等院 ほか

・第二回 十一月二日(日) 文学散歩 奈良散歩

興福寺 東大寺 ほか

△ゼミ相談会▽ 学生部会主催

十一月一日(水)～二日(金) ゼミ相談会

知真館一〇番教室

△同志社国文学▽

第七三号 二〇一〇年十一月二〇日発行

収載論文五編、資料紹介二編

第七四号 二〇一一年三月二〇日発行

収載論文八編、資料紹介二編

△国文学会会報▽ 第三八号 二〇一一年三月二〇日発行

二〇一〇年度修士論文題目

『源氏物語』方法としての和歌

——桐壺更衣の和歌を中心に——

牧野 さやか

『今昔物語集』巻九孝子説話考

——巻九第四話と第二十話を中心として——

鈴木 亘

謡曲《善知鳥》小考

家原 彰子

——地獄描写と鳥尽くし——

『日葡辞書』との対比から見た『倭語類解』の収録語彙

扠 圭珍

江戸小説における浮世草子利用

矢田 真依子

導かれる読者～谷崎潤一郎・『支那趣味』のスタイル～

三宅 良昭

佐藤春夫と台湾

東 花純

——『霧社』を中心に——

創作探偵小説の黎明期における横溝正史

——『新青年』創作探偵小説懸賞投稿作をめぐって——

漣 夢大

「パノラマ館」に見る同時代

——萩原朔太郎「青色のさびしい光線」、

「叙情詩物語」、「パノラマ館にて」論

内田 大貴

考——

日本近代文学における〈デカダンス〉

——坂口安吾「デカダン文学論」を焦点として——

福岡弘彬

中世後期の口語資料における漢語の実態と継承について

——『エンポのハブラス』を中心に——

小説テキストにおける受身表現

張 潔  
山本和恵

二〇一〇年度卒業論文題目

神武天皇皇后選定の条の丹塗矢の象徴しているもの

今堀紘邦

仁徳記の女鳥王の物語について

風土記における羽衣説話とその機能について

——「伊香小江」と「奈具社」を中心に——  
横山春夫  
北山舞

柿本人麻呂「石中死人歌」

——その表現と位置づけ——  
川井佐和子

大津皇子辞世歌の位置

——「雲隠る」を手がかりに——  
小泉明日菜

大伴家持「二上山の賦」の形成

——『万葉集』巻17・3985～3987番樋口孝栄

歌について——

万葉歌に見られる「嘆き」について

『万葉集』における詠物の歌の表現

——比較文学的観点から——

『靈異記』における行基説話の目的について

『和泉式部日記』における「月」

——修飾部分を中心に——

光そへたる夕顔の花

——贈答歌の解釈の試み——

秋好中宮について

——物語中における様々な役割——

『源氏物語』明石姫君の独自性と光源氏の准太上天皇位

——姫君の通過儀礼と作中初詠歌を中心に——  
木村能章

『源氏物語』宇治十帖における木の喩と「俗／聖」

——八宮と薫を中心に——  
吉田衣里

最後の恋、薫と浮舟の行方

——『源氏物語』結末についての一考察——

『源氏物語』における継子いじめ譚

——光源氏、紫の上、玉鬘を中心に——  
森あかね

『源氏物語』における移り香・残り香

——香りがもたらす機能について——  
橋本郷史

荻原星美

前泉有里

福本岳大

沼津里奈

林真帆

宮崎佳奈

赤井美穂

橋本郷史

母を恋う男たち

——『源氏物語』が谷崎潤一郎に与えた影響—— 中村友紀

『源氏物語』における引歌の機能

田中佑果

——光源氏と女君の手紙から——  
心情語「うし」と「世」、「身」

——『源氏物語』、『紫式部日記』、『紫式部集』—— 木村珠莉

における女性と「うし」——

説話世界の安倍晴明とその実像

伊藤綾那

——晴明の超越性——

『梁塵秘抄』の法華経二八品歌

佐々木委久

——提婆品・方便品・陀羅尼品を中心に——

白玉から考察する『新古今和歌集』八五二番歌

廣岡いづみ

『金槐和歌集』三四九番歌における「実朝劇場」の展開

——「もの言はぬ」実朝の言語感覚—— 前田智美

『平家物語』諸本における横笛の人物像

栃本綾

覚一本『平家物語』安元御賀回想場面に見られる維盛像

——諸本・他作品を通して—— 徳田詠美

『新勅撰和歌集』桜歌群

奥田優

——季節の推移表現の考察——

『義経記』における美化

渡邊萌

『閑吟集』の配列

御伽草子『天稚彦物語』の独自性

『鉢かづき』研究

『御伽草子』「浦島太郎」の歴史の変容

——古代浦島説話との比較をめぐって——

お伽草子「酒吞童子」の古態性について 宮本賢太郎

伊吹山系「酒吞童子」に見える『伊吹童子』からの影響

内山直樹

渋川版御伽草子挿絵から本文へ

——黒田日出男論の再検討——

『十二類絵巻』の主題

——仏教と狸の描写から——

井出——和歌と菓子の関係——

謡曲における小町の役割

『伊勢物語』の受容

——男性用装身具に注目して——

近世文芸と西行説話

——〈西行〉の多様性——

『万の文反古』論

——手紙形式の利用——

森崎公平

疋田奈央

花岡舞

松田佳子

宮本賢太郎

内山直樹

藤浪正樹

梅田昌孝

田中由里子

山田夏樹

田中睦子

細川珠代

齋藤麻智

酒吞童子物絵本の特色と傾向

小林 愛

四世鶴屋南北「四天王産湯玉川」の作劇法

——他作品からの趣向取りを中心に——

由留木 安奈

『新著聞集』と戯作

今本 美紗子

歌舞伎十八番「勸進帳」における能「安宅」の受容方法

——鎌田又八に注目して——

早川 広子

お七物の展開と趣向

谷口 綾奈

蕪村研究

田邊 辰哉

——「天人お七」を中心に——

中村 小雪

——怪異趣味が与えた影響——

森井 詩織

『芝浜』の変遷

濱 壽孝明

——滑稽本を中心に——

北見 渉

芝居小屋の中の観客

板川 泉

「神経病もの」における怪異表現

荒木 ちひろ

——「川柳江戸歌舞伎」を中心に——

小松 真実

——怪異・愛執から自我へ——

宮崎 祐子

せりを使った舞台演出

森野 めぐみ

近世文芸と流行病

田中公実子

樋口一葉「十三夜」にみる女の強さ

内山 裕香

——文学的妄想力——

横山 祥子

——「善徳と巫女」論

太井 裕子

近松世話浄瑠璃における金銭

中林 沙也加

——「未明のロマンティズム」——

板倉 悦子

文芸における（鵜飼）

芥川龍之介「偷盗」論

山本 早記

——近世の「日蓮記物」浄瑠璃・歌舞伎に注目して——

——兄弟と沙金を中心に——

山中 麻衣

芥川龍之介「偷盜」

——世界を構成する要素——

有島武郎「石にひしがれた雑草」論

——人物設定の虚構に表れた大正時代——

芥川龍之介「枯野抄」

——エゴイズムの先にみえるもの——

芥川龍之介「六の宮の姫君」に表現されているもの

谷崎潤一郎「アゼ・マリア」

——聖母の光を求めて——

「注文の多い料理店」の書かれた背景

——ルイス・キャロル「不思議の国のアリス」との比較——

『心理試験』における江戸川乱歩の作品創作に対する姿勢

川端康成「伊豆の踊子」

——「孤児根性」による社会との差異意識の回復——

「玄鶴山房」論考

——暗さの手法の考察——

須古星 亜矢

水口 まいか

岩本 望

吉村 太一

佐藤 未央子

鈴木 龍一郎

永井 達也

森嶋 志帆

中浦 新太

冒険小説としての『瓶詰地獄』

江戸川乱歩「押絵と旅する男」

——二つのイメージをつなぐモチーフ——

「春琴抄」を想像すること

——「ほんたうらしさ」について——

詩人の書いた小説

——「日清戦争異聞（原田重吉の夢）」を中心に——

「日陰の村」奥多摩ダムと黒部ダム建設に見る

——ダム小説論——

「魔都」に見る久生十蘭の都市観

なぜ『老妓抄』は名作とよばれたのか

——ナルシシズムの観点から——

岡本かの子「鮎」に見る食の表現

『牛人』における父子の諸相

織田作之助「世相」論

——成立と形式をめぐって——

『斜陽』論

——かず子の担う役割とは何か——

野口 知

今西 ひでみ

松森 一真

神谷 美百合

斉藤 祐太

石橋 知子

横井 麻未

大當 詩歩

櫻井 志保

辻田 竜一

中川 聡美

太宰治『斜陽』

——「蛇」から見る世界——

安武千尋

有吉佐和子『夕陽カ丘三号館』論

——閉じられた「ウチ」世界の住人たち——

辰巳幸

太宰治『桜桃』成立考

——「障がい受容」という山にむかひて——

谷口由利子

児童文学作品『プー等あげます。』における灰

谷からのメッセージ

吉水崇

三島由紀夫『獅子』の悲劇精神と『メーデア』

吉行淳之介『驟雨』論

——娼婦の街から見えてくるもの——

友池愛

村上春樹『羊をめぐる冒険』

——アメリカ文学からのアプローチ——

田中陽子

大江文学のスタイル

庄野潤三『静物』論

「憂国」に込められたもの

——理想の死——

中西海里

「世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド」論

——「責任」考——

花岡章伍

『古都』論

——二重に重なる伝統工芸に目を向けて——

村田昌吾

「ファミリー・アフエア」から見る村上春樹のり

アリズム小説への挑戦と役割

射庭綾乃

『砂の女』

——社会構造から見る公房の居場所——

山田佳苗

『陰陽師』シリーズから見る鬼と博雅

『少年アリス』に込められた長野の想い

貝山直美

『高瀬川』論

——「高瀬川」を流れる〈変容〉と〈普遍性〉——

幸野直樹

重松清「エイジ」論

甲田学人作品における見立て

照喜名麻衣

新小説としての「あゝ、荒野」

『家族八景』とホームドラマ

有田祐輔

「乳と卵」論

——大人になりたくない心理——

池田成洋

福島佑桂

古代語の遠称指示詞カ系語とア系語がもつ意味領域の差異

島山 茉莉奈

源氏物語柏木巻の筆写諸本にみる仮名字体の変遷

新安 禾苗

「よそおう」周辺の語史

内野 由縁

今昔物語集の動詞の用字法

山田 雄大

——統一性と多様性——

鎌倉時代の女房詞

日夏 景

——中世女流日記を中心に——

『とほがたり』の仮名遣い

井上 肇

洒落本におけるあいさつ言葉

古田 あずみ

——感謝・謝罪・依頼・慰労を中心に——

『ビロードのつぎ』・『百まいのきもの』からみた石井桃子の翻訳

青木 春花

絵本・児童文学における老人女性の言葉

内川 澄恵

——「おばあさん語」を中心に——

青少年向け小説における自称詞

小塚 梨奈

——役割語の観点から——

少女マンガにおける終助詞の使用について

金山 雄哉

ファッション雑誌の文体について

——女性誌と男性誌の比較——

田中 千晶

接頭辞「お・ご」

——TVドラマでの使用様相——

上 島 涼

テレビドラマにおける外来語の使用実態

坂口 睦

和歌に用いられるテマという語の意味

救仁郷 祐大

動詞「召す」の意味領域の拡大

——「乗る」「着る」の尊敬表現との関わりをめぐって——

奥 彩乃

意志表現の歴史的変遷と相互比較

——「(よ)うと思う」「(よ)うと思っている」「つもりだ」について——

中村 香生里

文機能が規定できる範囲

一般語彙化するオノマトペの様相

あいさつ語「お疲れ(さま)」の使用と意識の現状

岸本 彩

敬語に関する意識調査

——「あげる」の美化語化について——

林 真千子

京都府京都市上京区における方言の共通語化

——場面差による語彙選択とアクセント——

岡本 美裕紀

韓国語における語の高低パターンについて

長澤 尚美

細見 茉由